

○邦人と外人の目に映ずる秋の景趣

(黒田清輝氏の談)

▲十日ばかりの秋 日本の秋の季節は巴里倫敦の畫家の知らぬ趣味である空飽くまで澄で紺青濃く銀杏の黃楓樹の紅の美しき秋の天地は他國では見られぬ景色である巴里の秋は極めて短かく小雨しとく降りてそれが晴れ上ると木の葉や、黄ばみ十日ばかりで搖落す短かい秋の生命である

▲菊に對する感情 菊はこれまでは東洋特種の草花であつたが此頃では佛國にも英國にも盛んに培養され其花の種類も頗る多く美事な花が出来るやうになつた花の季節には菊花の品評會のやうなものが開かれ千種萬花の數を盡し中々盛んなものである、けれども歐洲人の見る菊の趣味は日本人のとは些か違ふやうで、花の種類を多きを賞する、それに我國では菊花が帝室の御紋章となり又支那の詩人は隱邊の風趣を賞し仙家の花と稱へ露に枯れぬ節操を愛するといふやうに一の感興を花に寄せ崇高なる花として見るが歐洲人には其やうな觀念はない只單純に美しい花として愛觀するばかりである一体我邦の詩人美術家は月に對すれば哀感を起し秋の感じは淋しく哀れなもの、やうに思ひ做すがその感じの起るといふものは古人の詩や歌の感化に依るもので月そのものが哀れなだけでは無い櫻に對するも然りであるこの花が大和魂を代表し散り際の勇ましいのを賞する等一種の感情を見且つ畫くが歐洲ではかくの如き他から犯された感興が無いから月を見ても花を見ても極めて單純に美感するばかりである菊の花はクリサンチナムと稱するがこれは希臘語で「黄金の花」と譯せられる、菊の黄色を賞するは東西其揆

を一にして居るのも妙だ

▲日本畫と西洋畫の相違　歐洲の畫家は樹の花は餘り愛好せず又畫にもしない花といへば草花である、而してその草花を描くにも風景を描くにも日本舊來の畫家は花そのもの風景そのもの、情趣を直に畫にするが歐洲の畫家は直ちに草花や風景ばかりを描ずして人物を以て側面から趣味を描するのである例へば秋景を寫さんとすれば景色は副物として其處に人物を出し其人物の感じに依りて景を現はすの手段を取る、つまり人物本位で、風景草花は添物とされるのであること、が日本畫家と歐洲畫家の描寫法を異にする點であらう

▲多くは専門　又歐洲の畫家は多く専門に依て居る海を寫すものは海ばかり一生描て居るし陸を寫す者陸の中では山に得意なもの田園の景色に得意な者又家屋に長ずる者其又家屋でも田舎家と都會の家屋との長所を異にするものもある日本の畫家のやうに山水花卉人物何でもござれの器用な畫家はまづ少いのである

▲歐洲畫家の見たる風景　日本の風景は多少歐洲畫家に誤まつて見られて居るやうだ、佛蘭西からも第二流位の畫家で漫遊に來たものも少くはないが日本人の目の着け所とは異なつて居る、つまりそれは廣重などの風景畫を標準として總ての日本風景に對するからでもあらう、されば日本人の見て以て絶景とするものも歐洲畫家には左程とも思はれないが多いやうである